

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	テヘラン便り 〈報告・紀行〉
Author(s)	縄田, 鉄男
Citation	広大言語 , 9 : 10 - 13
Issue Date	1969-12-23
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046334">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046334</a>
Right	
Relation	



ないというから、到底正確な数がかめられないと思われる。

総人口の約60%以上がパシュト族(パターンともいう)で、現王家はもちろん、政府交官筋も、この部族出身者で占められており、従つて彼等の他部族に対する自尊心が強いことも、如実にうかがわれる。この部族の言語は、パシュト語で、これについての専門的研究は、広大言語学教室の先輩、縄田鉄男氏が、かつて総会で発表されたことがある。—因みに、われわれの調査行に対して、同氏が公務多端の折にもかかわらず、遙々テヘランから来られ、始めの10日間通訳として、ご協力をいただいた。ここに重ねてご好意に対し、深謝申しあげたい—このパシュト語を、アフガニスタンの公用語としたいという国の意向は、明らかに察知されたところで、公務員には、その習得が要請されているようで、講習を終了すれば、給与が上がることも聞かされた。都のカーブルには、パシュト語の書物だけを取扱かう店もあり、中学校の英語教科書の巻末の単語集には、この国の共通語であるファルシー語(アフガン・ダーリともいう)とパシュト語が対照して書かれていた。アフガニスタンの言語が、右の様であるとしても、国民の90%以上が、文盲という現状では、われわれからすれば、又何を可言わんやと申すより外はない。気の毒と言おうか、哀れと言おうか、約1カ月にわたつて生活をともにしたわれわれが雇つた2人の運転手(1人は、パシュト族、他はモンゴル系のハザラ族の出身者)との接触で隊員が一様に痛感したところでもある。

縄田氏と別れた以後のわれわれは、有無を言わず、文盲の彼等と不完全なファルシーで意の疏通をはかるのに苦勞させられた。文字を書いても駄目で時には動作で、またある時には絵を書いて—しかも彼等の発想がわれわれのものとは異なつていることもあつて、意思が通じた後で大笑いすることも、再三ならずあつた。

自国の地図局発行の地図を、驚きの目をみはつてみつめているから、「君の町は、地図の此処に書いてあるよ」と、図上に示してやつても、そこに書かれている文字が読めない哀れさ。「ホウ私の町が、この地図に書かれているのか」と、握手を求めて来たある町のゲートを護る兵士もいた。

このような国民の姿が、いつになつたら見られなくなるであろうか。言語と文盲についての、私の感懐の一端を、ここに抜き書きした次第である。(1964.10.28)

## テヘラン便り

昭和44年10月2日記

縄田鉄男

1. 日本学術振興会の西アジア地域研究調査実施のためイラン国テヘランの出張を命ぜられ、昭和44年4月2日、SK984, DC-8で12:20分羽田発マニラ、バンコック、カラチを経由して、同日23:35分現地テヘランに着く。

前任者の本田実信教授(北海道大学、東洋史)。Mr. Foroutan、村田さち子、羽田幸一両氏などのお出迎えを受けてから、テヘランでの生活の第一歩が始まった。

村田、羽田の両君は、ともにテヘラン大学 留学生。以降大したこともなく10月2日でちょうど7ヶ月の月日が経過。西アジア研究センター(仮称)は、西アジアの歴史、考古学、美術、言語を専攻する学者の連絡所であると共に、駐在員の研究の本拠地でもあります。

サーヴィス業務と研究の二つを兼ねているわけである。勿論のことながら、イランを含む西アジアが学問的に重要な地域である事は、誰も疑うことは出来ない。

- 2 イランの古代先住民はヤベテ系及びドラヴィダ系の民族で、その後インド、ヨーロッパ語族のメディア人、ペルシャ人が西北地域に現われたのが、B・C 900頃。月氏などをはじめとして、トルコ系、モンゴル系民族の侵入、11世紀のセルジューク族の侵入、13世紀のチンギスカン、トルクメン等々、きわめて複雑である。その成立過程は、たどることは容易でない。現在の民族構成は、ほぼ123世紀に出来あがったものと見做して良いであろう。

1956年のイラン国の人口調査によれば、総人口、18,954,704第2回の1966年のそれでは、25,781,090、住民の4分の3位はペルシャ語を解す。大きく、イラン系、トルコ系、セム系に大別出来る。イラン系には、クルド族、1,060,000(1960年)、ルル族 1,080,000(1952年)バルチ族430,000(1956年)、その他の少数民族。トルコ系には、トルコマン330,000(1956年) Q a s h q a i 150,000など。主として南東部に住むアラブ人。その他少数グループに属するものにネストリウス・キリスト教徒3000、アルメニア50,000人。目下の仕事は、イラン系の諸言語の調査で、これまでクルド語、カスピ海岸のガーリシー語、ターリシー語及びペルシャ語およびその方言の調査が不完全ながら小生の手がけたものの主なものです。その他に調査旅行を兼ねて、Isfahan, shiraz, persopolis, Behistun, Tabriz, Mashhad, などの旅行を行いました。言語研究調査の宝庫の様な国です。民俗学、民族学、などの宝庫でもあります。一日も早く、それも出来れば日本人の力で調査が出来れば良いのですが。

3. テヘランでは、外国の研究所の研究、出版活動も活発で、フランスの Institut Franco-Iranien (Franco-Iranian Institute) の Département d'Iranologie は Institut d'études iraniennes de l'Université de Paris と協同で、Bibliothèque Iranienne などの叢書を出版。その他の研究所としては、Austrian Cultural Office, British Institute of Persian Studies, Goethe Institute, Irano-India Association, Iranian Society for Cultural Relations with the U. S. S. R., British Council などあり、それぞれの歴史を有し、映画会、研究会、講演などを行つて

ている。

4. イランにはテヘラン大学(1935年創立)、イラン国民大学(1959)ゴンデイ・シャール大学(1955)イスファハーン大学(1958)メシュハッド大学(1955)パルビー大学(1945)ダグリーズ大学(1947)あり、高等教育もさかんで、文化活動にも見るべきものがあるように思われます。出版活動の方という、まずテヘラン大学のそれが挙げられます。

Entešārāte Dānešgāh-e Teherān(publication de Université) 目録も出ています。一般読者目あての週刊紙も多数のほり、日本ほどではなけれど、「婦人生活」「ヤングレディ」「平凡」などに類したものや「映画の友」のようなものも多数出版されています。紙面の都合でその名称をすべて挙げる事ができませんので、以下に学術的なもののうち主なものを挙げてみることにしよう。叢書、月刊、季刊、

- (A) Ho var va Mardon (Art and People) 月刊  
(B) Bastan chenasi va Honar-e Iran (Revue d'archeologie et d'art dent iraniens) 季刊  
(C) Bonyād-e Farhang-e Irān (Irānian Culture Foundation)  
(D) Entešārāt-e Farhang-e Irān- amīn (publication de culture iranien )  
(E) Entešārāt-e dānešgāh-e Feherān  
(publication de Université de Feheran)  
(F) Zabān va Farhang-e Irān  
(Iranian Culture and Literature)  
(G) Bonyād-e pahlavi: Entešārāt-e Bongāh-etarjme va nušr-e Ketāb (publication of Foundation of translation and publications)  
(H) Sokhan (Revue Mensuelle de la Litterature et l'Art contemporaines)
- この中で例えば、(C)の Iranian Culture Foundation の出版物の二、三を挙げると、

Vazenameye pahlavi (pahlavi glossories)

Series には、Farhang-e Pahlavi (Pahlavi-Persian Dictionary) Vāženāme ye Bondehešn (Glossary of pahlavi Bundashishn), Manzūme-ye deraxt-e āsūring, Farhang-e Hezavārshāya Pahlavi あり、中世ペルシャ語の研究も行われている。

他のSeries には、Philosophy and Mysticism in Iran, Science in Iran, Manuscripts, Sources of Iranian History and Geography, Persian Language and Literature, Arabic Glossaries, Folklore あり。

5. 最後にテヘラン市の一風景。イラン高原の北部アルボルズアルボルズの南麓の盆地にあるイラン第一の都会。西欧風の住宅あり、20階建の高層ビルもあり、人口ほぼ300万位の中近東最大の近代的な都会である。先帝Reza Shahの徹底的改革の結果か、まるで西洋にいる様な感じ。最近、道行く若い女性も、とんぼのような大きな「眼鏡」をつけ、「ミニスカート」(ペルシャ語でmini-zūp. 勿論zūp. はフランス語のjupe より。因にペルシャ語の近代に於ける借用語の第1位はフランス語)を身につけている。

その中にmini-nāf, mini-meme になるのだそうです。(タクシーの運転手の話による)。Nāf の方はNavel。Meme は分語でpestān。この方は英訳をつける訳にいかないので学究心のある方は、H. Haim のThe One-Volume persian-(ハイフン)English Dictionary を参照されたい。1961年版だとその847頁の右の欄にあり。演説と何とかは適当に短い方が良いでしょう、ではこの辺で。

～ 終 ～

## ペロポネソスの旅

関 本 至

1967年9月下旬、ギリシャ滞在予定日数も残り少なくなつたある朝 私はアテネを発つてペロポネソスへの一人旅に出た。コリントス、ミケネー、エピダウロスなどペロポネソス東北部の旧跡はアテネからの日帰り旅行ですでに一応見学をすませていたが、残る地方はまだ訪ねる機がなかつたのである。

アテネのペロポネソス停車場を9時に出発するオリンピア行きの列車に乗る。列車ははじめ北へ